

## 症例報告

アルコール依存症者の放火  
自殺未遂か否かが問題となった2症例

小林 一 弘\*

放火の研究は、放火をおかした根源にある精神疾患からの研究と放火にいたる精神病理学的研究に大別され、中田<sup>3)</sup>は、わが国でも放火と自殺との関連性に関心が払われており、中村や小木の先駆的研究があると述べている。アルコール依存症者の自殺手段について、岩崎<sup>2)</sup>は大原の報告を引用して刃物、溢死、入水などの過酷な方法がとられやすく、斉藤の統計を引用して服毒32%、手首切り13%、ガス自殺13%、切腹10%、入水6%であったと述べている。このように、アルコール依存症者の自殺手段として放火(焼身自殺)は少ないようである。しかし、狂言的な放火、犯行前にその予告がなされる放火があり、自殺未遂を訴えて、精神鑑定の場合にも登場することは少なくない。精神鑑定の場で放火の理由として自殺を望んだと証言したが、その訴えが疑わしかった2例を報告する。

## はじめに

放火は、自殺手段で企図されるものだけではない。筆者が以前報告したような自己卑下感の中で自己実現を目的としてみた男性事例<sup>1)</sup>や、4日間に6回の放火を繰り返し愛情と攻撃性の上に視野狭窄等をおかしたと判断した女性例<sup>4)</sup>のように、自己卑下感、攻撃性、視野狭窄等が重なり合って事件にいたる場合も少なくない。今回報告する2症例も、アルコール依存症を精神疾患としてもつ

ていたのは確かだが、犯行にいたるまでの精神病理的考察が重要だと考えるものである。

## 1. 症例1

アルコール依存症 酩酊常態 犯行当時46歳  
男性 無職

両親はけんかがたえず、症例A(以下A)が物心つく前に離婚した。小学校から高校卒業まで学業成績は下位。神経質、自己中心的、短気な性格で、教師の机から金品を盗んだり賽銭泥棒をしたりすることがあった。Aは高校卒業後も定職につかず、水商売を転々とした。本人弁ではこの頃、初飲。22歳頃には、1から2升の日本酒を常習飲酒するようになった。断酒に対する妻の理解、協力はなく、自ら数回断酒を試みることもあったがすべて失敗。また、妻に対し暴力をふるうようになった。37歳、離婚したが、この頃には手指振戦、不眠、嘔気等の離脱症状がみられた。それからというもの、酩酊して壁をけったり、夜中に大声で騒いだり、近所の住人に暴言をまくこともあった。体調も不良で、倦怠感、嘔気、胃部不快感に苦しんだ。労働・生活能力も低下し、税金も払えず、家具類も差し押さえられた。犯行当日、「部屋に火を付けて死んだらどんなに楽だろう」、「今日6時頃、大事件がおこるぞ」などと近所のタバコ屋等に話しかけ、自室に戻ってテレビ局に「差し押さえで苦しんでいる。死ぬしかない」と電話をかけたたりしている。しかし、相手にされず、飲酒をはじめ(量不詳)、部屋に灯油をまいて点火したが、Aはすぐに逃げ出し、近所の交番に出頭し速

\*岩屋病院精神医学(豊橋市)(こばやし かずひろ)

捕された。

## 2. 症例 2

アルコール依存症 酩酊常態 犯行当時42歳  
男性 土木作業員

本例の両親も不仲で、症例B（以下B）が物心つく前に両親は離婚した。父方に引き取られて生活。家庭は生活保護を受けていて、満足な食事もとれなかったという。Bは小学校時代、窃盗を繰り返し、9歳で施設にあずけられた。15歳の時、B本人の希望で水産加工会社に入社しアパート生活をはじめた。しかし、次第に怠業が目立つようになり解雇された。この頃、アミノプロパン等の有機溶剤吸引が機会的に認められる。その後、水商売を転々として、一晚に日本酒1升は平気で空けるようになった。36歳、見合い結婚したが、次第に暴力が激しくなり、妻も断酒に対する理解はなく批難や罵倒を繰り返すばかりだった。Bは団地内を木刀を持って徘徊することもあった。この頃には、離脱症状のため飲まずに入られなかったという。42歳、家賃不払いのため家具差し押さえの通達がされたが、患者は無視した。事件当日、外出から帰ると家財道具の多くが運びだされていた。その後、日本酒を飲み始め（量不詳）、テレビ局に放火を予告する電話をかけたか、団地内や近所で「今日はお祭りがあるぞ」といい回った。

同日夕刻、アパートに灯油をまき、点火後すぐ逃げだした。まもなく警察に出頭、逮捕された。

## 3. 考察

2症例には、非常によく似た生活歴が認められる。両親の不仲、幼い頃にすでに両親の離婚を体験していること、非行歴、職についても長続きせず、妻への暴力などであるが、これらはアルコール依存症者によくしばしばみられるのでここではふれない。

症例が、放火にいたった経過をみていきたい。さて、アルコールと犯罪の関係は、自殺も含めて、

多いのは周知のことである。アルコール依存症者は連続大量飲酒からぬけだせなくなると、精神的、身体的、社会的障害をきたし衝動的に自殺を企図することも多いといわれるが、Beck<sup>7)</sup>は絶望感をRitson<sup>7)</sup>は社会的孤立常態、喪失体験を重視している。2例とも、健康に優れず、社会的にも孤立。妻は断酒に理解、協力することもなく口論や喧嘩を繰り返し、離婚という喪失体験に至るといふ絵に書いたような経過をたどっている。家庭の中で、文句や罵倒の言葉ばかり並べたてる妻に対し、とともに妻に対する「他者攻撃」の衝動が生まれたのは想像に難くない。さて、大原<sup>8)</sup>はアルコール依存症者においてMenninger<sup>9)</sup>のいうところの「殺したい願動」、「殺されたい願動」、「死にたい願動」について調査し、アルコール依存症者には「自己破壊衝動」が高いと述べている。症例の心の中には「自己破壊衝動」、「被害感」は「自己破壊」または「自己攻撃」の衝動につながった。さらに、「自己攻撃」が「他者攻撃」と連続性を持つことは周知のことである。症例では、共有財産を媒体とした妻との「擬似共同体」への攻撃（放火）が認められる。症例の心中で「他者攻撃」の衝動が生まれたことに矛盾はない。そのため、症例では、共有財産を媒体とした妻との「擬似共同体」への攻撃（放火）が認められるであろう。

また、「他者攻撃」の衝動は拡大し、第三者への「無差別攻撃」の衝動に広がる傾向があるといわれている。症例は公共報道機関へ電話をしたりタバコ屋で事件を仄めかしたりしているが、むしろ犯行を楽しんでいるようにも感じられる。これは、症例の「他者攻撃」の衝動は膨張・拡大しようとするが特定の対象が存在しなかった。そのため、「無差別攻撃」は世間全体へのメッセージに変形したのだとは考えられないだろうか。つまり、アルコールと抑制性の薬物の影響下で、「無差別攻撃」の衝動の対象は定まらなかった。そこで、症例にとって「今・ここ」でできる「無差別攻撃」が自殺予告というかたちで「世間全体をさわがせる」ということ位だったのかもしれない。もちろん犯罪は、単一の動機で説明できるものでは

なく、多くの動因が重なり合ったけっかである。2症例にも「自己破壊衝動」は存在するのであろう。しかし、2症例とも「攻撃衝動」が認められる一方、「アピール性」が顕著に認められ、「自己実現」をもとめた精神分裂病の症例<sup>9)</sup>と似た点がある。そして、公共報道機関へ電話をしたりタバコ屋で事件を仄めかしたりし、火をつけるとすぐ逃げ出している一連の行為を考慮すると、世間をさわがそうとする「演技性」、「アピール性」を終始している印象が強かった。

### まとめ

放火を犯したアルコール依存症2症例を提示した。アルコール依存症者では「自己破壊衝動」が高く、「自己破壊」または「自己攻撃」が「他者攻撃」と連続性する。症例では、財産を媒体とした妻との「擬似共同体」への攻撃が認められる。しかし、公共報道機関やタバコ屋での事件での自殺を仄めかしたことで、犯行後のすばやく避難したときからは、計画性が伺える。

まとめると、「無差別攻撃」「自己攻撃」の衝動は認めるものの、世間全体を騒がそうとする「演

技性」、「アピール性」がより強く感じられるものとなっており、自殺既遂が放火、第一の動機であるか否かは疑わしかった。

最後に、2症例とも、「自殺の意図は疑われるが自殺の恐れは否定できない」として、某薬物専門治療病棟のある精神病院に措置入院となった。

### 〔文 献〕

- 1) Beck, A.T., Weissman, A.: Alcoholism, hopelessness, and suicidal behavior. *J. Stud. Alcohol* 37: 66, 1976.
- 2) 岩崎正人: アルコール依存症と自殺. アルコール臨床ハンドブック、講談社、東京、1985.
- 3) 小林一弘、大原健士郎: 自殺を目的とした放火. *精神医学* 37: 1112, 1985.
- 4) 小林一弘、今泉寿明、石川 元: 短期間に6回放火を繰り返した一中年女性の鑑定例. *臨床精神医学* 18: 1633, 1989.
- 5) Menninger, K.: *Man against Himself*. Hartcourt Brase and Comp, New York, 1983.
- 6) 中田 修: 放火の犯罪心理. 金剛出版、東京、1977.
- 7) 大原健士郎、鈴木康夫、本間 修: 自殺とアルコール依存症. *社会精神医学* 4: 33, 1981.
- 8) Riston, B. Alcoholism and suicide. In *Alcoholism*, Croon Helm, London, 1977.